

論文要旨

地域コミュニティ内の社会的支援の役割に関する研究

-愛玩動物飼育者の主観的幸福・孤独感への影響-

経営学研究科
経営学専攻 修士課程
マーケティングコース
上森 裕司

現代社会において、ペットは家族の一員として深い感情的なつながりを持つ存在となっている。獣医療、ペットフードの発展により、ペットの平均寿命が延び、飼い主とペットが共に過ごす時間が増えたことで、絆が深まっている。一方、少子高齢化と核家族化の進行に伴い、身近に相談できる人や頼れる家族がいないため、孤独を感じる現役世代が増加している。孤独は動物虐待にも影響を及ぼし、2021 年には過去最高の虐待件数が記録された。本研究は、ペットを介して形成される社会的ネットワークが飼い主の幸福感や孤独感に与える影響を明らかにすることが目的である。

関連する先行研究から主観的幸福、孤独感、社会関係資本、コミュニティ、適正飼養の 5 つの概念を用い、導出されたプロポジションを基に 8 名の飼い主と 13 名の事業者を対象としたインタビュー、フィールドワークを実施し、4 つの発見物があった。第 1 に、適正飼養を実践している飼い主は、獣医師、ブリーダー、動物愛護団体、しつけ教室、友人、インターネットから飼育に関わる情報を取得し、異なる情報源を相互補完的に利用しながら知識を身につけていた。飼育情報の取得は、愛玩動物の飼育に関わる社会的ネットワークを形成するための出発点となる。

第 2 に、犬は旅行やペットイベントで、猫は日常的な触れ合いと飼育情報を得る過程で生まれるコミュニケーションが幸福度の向上と孤独感の軽減に繋がっていた。

第 3 に、愛玩動物の飼育に関わる社会的ネットワークが社会関係資本を育み、現役世代を含む飼育者のセーフティネットとして機能していることが明らかとなった。犬の飼育者は、日常的な散歩やペットイベントへの参加が交流機会となり、猫の飼育者は、地域猫活動が契機となりネットワークを形成していた。東京都新宿区を対象にした調査では、行政、獣医師、動物愛護団体、ペット事業者、地域住民が一体となった支援体制が構築されていた。この連携がネットワークの維持と発展に重要な役割を果たし、高齢者世代に比べて支援が届きにくい現役世代に対するセーフティネットとしても有効であることが示唆された。

第 4 に、愛玩動物の飼育に関わる社会的ネットワークは、子育て世代を支援する役割を果たしていることが明らかとなった。ペット飼育者によって形成されたネットワークは、同じ

時期に子育てを行う世代のみならず、世代を超えた育児経験者からも情報を得ることが可能となり、子育て家庭の悩みや孤独感の軽減に寄与していることが示唆された。

本研究のインプリケーションとしては次の 4 点が重要である。第 1 に、適正飼養が愛玩動物の飼育に関わる社会的ネットワークの起点となり、ペットイベントや地域猫活動を通じて地域住民間の交流を促進し、飼い主の幸福度向上と孤独感を軽減させ、動物虐待の防止に寄与することが示唆された。

第 2 に、犬と猫はその特性の違いによって幸福度と孤独感に与える要因が異なることが明らかになった。ペットの生体販売や譲渡に関わる事業者においては、飼育希望者に対して事前に犬や猫の特性に基づく情報を提供することで、飼い主との信頼関係が構築され、適正飼養の実施と幸福感及び孤独感に好影響を与える。

第 3 に、愛玩動物の飼育に関わる社会的ネットワークが現役世代のセーフティネットとして機能していることが示唆された。現役世代は、仕事や家庭の負担から町内会への参加が困難である。このような状況において、犬や猫という共通の関心事を通じたネットワークが、従来の町内会に代わり現役世代の交流機会を生み、災害時の情報共有といった相互扶助の役割を果たす。

第 4 に、愛玩動物の飼育に関わる社会的ネットワークが子育ての情報源として機能していることが確認された。こども家庭庁が推進する子育て支援拠点は、同世代間での悩みや情報が共有されるのに対し、ペットを通じて形成されるネットワークは、異なる世代間で交流が行われるため、育児経験に基づいた情報が得られる。共働き世帯の増加や町内会への加入意向が低い現役世代にとって、新たな情報の取得先となり、子育てに伴う課題や孤独感の軽減に寄与すると考えられる。

本研究により、愛玩動物の飼育に関わる社会的ネットワークが、飼い主の幸福感を高め、孤独感を軽減するだけでなく、動物福祉の向上にも寄与することが明らかになった。この発見は、従来の町内会に代わり、孤独を抱える現役世代の交流機会を生み、子育て支援や災害時の情報共有の役割を果たすと考えられる。